

白滝ジオパーク 再認定現地審査報告書（公開版）

審査員：中田 節也、橋詰 潤、坂之上 浩幸

1. 期間 2016年11月4日～6日

2. 主な参加者

【白滝ジオパーク推進協議会】

佐々木 修一会長(遠軽町長)、河原 英男(遠軽町教育委員会教育長)、渡辺 博行(えんがる町観光協会会長)

中村 康男(えんがる町観光協会専務理事)、佐々木 重俊(えんがる商工会事務局長)、本間 克明(遠軽商工会議所専務理事)、後藤 裕(NPO 白滝ジオパークサポートセンター)、宮崎 良公(遠軽町自治会連絡協議会会長)

【学術顧問】

木村 英明(白滝ジオパーク交流センター名誉館長)、和田 恵治(北海道教育大学旭川校教授)

【推進協議会ワーキングチーム】

中野 年雄(えんがる商工会青年部)、由利 敏之(生田原フィッシングクラブ)、杉山 俊明(遠軽高校教諭)、金子 恵美(ジオ・ザリ・クラブ代表)、林 廣志(遠軽町民)、佐藤 和徳(遠軽青年会議所)、村上 武志(えんがる町観光協会事務局長)、喜田 和孝(丸瀬布昆虫生態館学芸員)、佐藤 正美(丸瀬布昆虫同好会会長)、須藤 奈津美(マウレ山荘副支配人)、浅利 誠(遠軽町教育委員会)、只野 博之(夢里塾)、小山 信芳(丸瀬布昆虫同好会、夢里塾)、石原 徹(NPO 法人きたらしらたき)、古寺 博(白滝山岳会)、長原 裕一(遠軽町商工観光課)、矢木 優(えんがる町観光協会白滝支部 WT 代表)、渡辺 信吾(遠軽町民)

【えんがるジオ倶楽部】

竹内 紀久夫(専務理事)、遠藤 利秀

【丸瀬布昆虫同好会】

小田井 洋和、須藤 光春、柳田 友之、中野 力雄、滝口 節雄

【ジオパークガイド】

田中 茂、小野 弘雄

【アドバイザー】

横山 誠二(網走西部森林管理署署長)、山中 大志(北翔大学学部生)

【事務局】

加藤 俊之(遠軽町総務部長)、鴻上 栄治(ジオパーク推進課長)、中原 誉(ジオパーク推進課係長)、松村 愉文(ジオパーク推進課係長(兼))、瀬下 直人(ジオパーク推進課主任(兼))、熊谷 誠(ジオパーク推進課主任)、佐野 恭平(ジオパーク推進課技師補)、江村 徳義(地域おこし協力隊)

【その他行政機関等】

広井 澄夫(副町長)、松村 圭悟(総務部企画課)、高橋 昌宏(総務部総務課防災担当)

【視察同行】

下村 圭(三笠ジオパーク)、高橋 克己(道釧路振興局自然環境係長)

3. 現地審査行程

○審査1日目(11月4日)

13:00 旭川空港集合。昼食後移動。

15:35~17:15 白滝ジオパーク交流センター、遠軽町埋蔵文化財センター(施設見学、活動ヒアリング)

18:00 宿泊地到着 マウレ山荘(丸瀬布地区)

18:15 懇親会

○審査2日目(11月5日)

8:40~10:00 丸瀬布昆虫生態館(施設見学、活動ヒアリング)

10:10~10:50 いこいの森(施設見学、活動ヒアリング)

11:00~12:00 マウレ山荘(ヒンメリ製作体験)

12:00~13:00 昼食

14:00~17:00 白滝国際交流センター「コピエ」(活動報告会)

17:10~18:00 // 会議室(会長・事務局ヒアリング)

18:50 宿泊地到着(ホテルサンシャイン 遠軽地区)

19:00~ 交流会

○審査3日目(11月6日)

8:30~ 9:40 インカルシマチブラジोटゥアー(瞰望岩、れんが倉庫、遠軽協教会)(施設見学)

9:50~10:20 家庭学校礼拝堂(施設見学)

10:30~12:00 遠軽町役場大会議室(総評・意見交換)

12:20 昼食

13:30 (追加)MYSTAR(シナノキハチミツ使用の化粧品等店舗)

19:00 旭川空港解散

4. 現地審査まとめ(評価ポイント)

(1) 審査の概要

白滝ジオパークは、2010年に日本ジオパークの認定を受け、2014年の再認定審査時には、運営組織体制が不十分であり実質的に機能していないこと、マスタープランや年次計画が作成されていないことから、これらの課題を早急に解決すべきであるとして条件付きの再認定となった。

今回の再認定審査は、この2点を含めて白滝ジオパークの現状のヒアリングを中心として、各施設の見学や各体験プログラムの視察を通じ、白滝ジオパークの現状を審査した。

(2) 名称とテーマ

白滝ジオパークは、前述のとおり、ジオパーク構想は2005年の町村合併に伴い、衰退が懸念

される白滝地域の活性化を主な目的として提唱されたもので、ジオパーク名称については「白滝」と「黒曜石」を用い、さらにはエリアについても旧白滝及び旧丸瀬布地域を対象としていた。4町村合併協定に基き旧白滝村から遠軽町に継承されたものであり、白滝の名称を使用していた。

遠軽町全体でジオパーク活動を展開するにあたり、今回のマスタープラン作成の過程でジオパークの名称についても、白滝ジオパークのままでいいのかがワーキングチームで検討がされている。

その結果として、本ジオパークでは黒曜石が主役であり、「白滝ジオパーク」の名称がふさわしいという合意形成がされた。

白滝ジオパークは「黒曜石がつむぐ地球と人の物語」をテーマとし、今回作成されたマスタープランでは、基本理念のキャッチフレーズとして「この地を知り、活かし、創り、つなぎ、愛する」を掲げている。

(3) ジオサイトの管理と保全

黒曜石の露頭など保護エリアは国有林内にあり、森林法で法的に規制するとともに、林道のゲート管理などで露頭への侵入を制限するなど、森林管理署との連携により保護活動をしっかりおこなっている。また、石器作製などの体験学習では、廃材を利用するなど黒曜石の効率的な利用を図るとともに、ガラス材での代用を進めるなど、資源の活用の際にも持続可能な方法に取り組んでいる。一方で、森林管理署などがストックしている黒曜石の在庫が枯渇した場合、その後の研究者や博物館、教育機関にどのような仕組みで黒曜石を提供できるのかが今後の課題となる。

また、昆虫同好会が中心となったアサマジミの保護活動(自衛隊との協定締結)、ジオ・ザリ・クラブのウチダザリガニ駆逐・食育など、ジオパークと連携した保護・保全活動も進んでおり、高く評価できる。さらに、保全と活用をテーマとして開催した2015年JGN全国研修会の成果や、全国大会の保全分科会や保全WGの指針をもとに、3年以内に保全管理計画を作成するとしている。

(4) 教育・研究

2015年に博士号を持つ職員を新たに採用し、子どもたちを対象とした自然教室などのイベントも充実してきた。また、地元遠軽高校と連携し、「オホーツク風土研究」のカリキュラムの中でジオパーク、自然、防災について講座を実施。昆虫同好会やジオ・ザリ・クラブなどの団体と協働して自然教育のプログラムにも取り組んでいる。

2016年度から研究助成事業を進め、3件の研究活動に対し支援をしている。すでに研究成果の一部については、地元住民向けの発表会の開催や、地元小学校と連携し教育プログラムが実践されるなど、その成果をジオパークに還元する仕組みをつくった。

(5) 管理運営

前回の再認定審査で指摘があった大きな課題である管理運営体制は、組織改編を行い、地域の主要組織の任者と多くの地域住民が参加できる形としている。詳細は後述。

(6) ジオツーリズム

リスクマネジメントの一環で、携帯電話が使えない露頭ツアーなどの対策として無線機を導入し、ガイドから事務局に緊急時の連絡が可能となった。また、ヒグマやダニ・スズメバチなどの危険回避の対策としてツアー開始時に必ずレクチャを行っている。

年4回程度実施してきた募集型黒曜石原産地のジオツアーに加え、昨年度から有料のプライベートガイドツアーを開始した(ガイド派遣は事務局で受付)。また、ジオツアー以外でも森スパヘル

ツーリズム実行委員会が立ち上がり、温泉と森林・自然という地域資源を活用したツーリズムを推進する取り組みも始まっている。

また、白滝地区以外でも遠軽地区のインカルシ(瞰望岩)や教会など、町歩きでジオとの繋がりを楽しむツアーも始まり、今年度設置予定の解説板には2次元バーコードによる解説動画への案内など、新しい手法も考えられている。

ガイド養成としては、北海道アウトドア講習の基礎講習、他ジオパークの視察、知床のガイドなどの講師陣による養成講座、フィールドワークなどを開催している。えんがあるジオクラブがガイド団体としてNPO法人登録の予定であり、今後、ジオガイドの中心的な組織となると期待されている。

(7) 国際対応・ネットワーク活動

2015年に地質遺産の保全と活用のテーマで第7回JGN全国研修会を開催しその成果をAPGN山陰海岸大会で発表した。2016年には、北海道ブロックジオパークガイド学習交流会の開催、北海道博物館での特別展に北海道ブロックで協働して参加、事務局員によるJGN運営委員会の保全WG、国際化WGなどへの参加、済州島ジオパークに北海道知事および北海道ブロック各代表による表敬訪問の一員として佐々木会長が訪問するなどの活動をしてきている。

(8) 防災についての活動

白滝ジオパークは湧別川の氾濫などの水害が主な災害となっている。遠軽高校などでのジオ講座で遺跡と氾濫場所との位置関係など、ジオと考古学と防災を絡めた講座を実施している。

また、ジオカフェでアイヌ研究家をまねき、インカルシに残るアイヌの戦いの伝説に登場する洪水のエピソードなどを通じて過去の災害の伝承もしてきた。

高校卒業後転出する子ども達は、その居住地に起こりうる災害に対する防災意識をもってもらうことが重要であることから、地震や噴火災害など、水害以外の災害・防災についての解説もおこなっている。

(9) 前回審査での条件付再認定となった指摘事項への対応状況

【組織機構の見直し】

白滝ジオパークでは、2010年の日本ジオパーク認定時の協議会は、ジオパーク認定を目指して組織された白滝黒曜石遺跡ジオパーク構想推進協議会が母体であった。しかし、当時の協議会は個人会員の参加がベースとなっており、認定後の運営組織としての位置づけではなかった。一方、認定以前の2008年に策定した基本計画において運営の核と位置づけられたNPO法人白滝ジオパークサポートセンター(2009年に協議会の一部会員で設立)においても、町や協議会からの予算や人材などの機能移行や分担がうまく行かず、活動が停滞した状態で前回の再認定審査に臨んだ。

日本ジオパーク委員会からの指摘事項を踏まえ、白滝ジオパーク推進協議会の組織を現況報告書2ページの構成図のように改めた。すなわち、協議会は町内の団体組織の長で構成し、その中に、実働組織としてワーキングチームを設置した。ワーキングチームは会長が委嘱する各地域ブロックから選ばれた23名で構成され、同時に、3つの部会も設けた。そこでは、遠軽町全体でジオパーク活動を推進するために生田原ブロック会議、遠軽ブロック会議、丸瀬布ブロック会議、白滝ブロック

会議の旧4町村のブロック会議を部会とクロスする形で構成していることが特徴である。

協議会は学術顧問やアドバイザーから支援・協力等を受けながら、町の関係各課、経済団体、教育機関、地域住民団体、各 NPO 法人などが参画・連携し、ワーキングチームが実働部隊となって活動を進める体制が整えられた。

【計画作成への取り組み状況】

また、マスタープランの作成もワーキングチームが中心となった。13 回に及ぶ会議、現地調査、ワークショップなどでの協議や、住民アンケートやマスタープランのパブリックコメントなどを経て、ボトムアップでマスタープランやアクションプランを作成されたことは、高く評価できる。マスタープランはこれまでの経過を踏まえ、基本理念、現状分析と課題及び課題に対する考え方、保全に関する基本指針、基本戦略と数値目標設定で構成され、アクションプランを年次計画とし、地域の特性にあった計画である。

ただし、再編された組織やマスタープランはジオパーク活動のスタート点であって、それが画餅とならないよう、ワーキングチームや今後整備されるガイドクラブなどが核となってプランを着実に推進していくことを期待したい。

(10) ジオパークとして必要と思われる事項

①ジオパークの可視化について

白滝ジオパークは遠軽町全体をそのエリアとしているが、白滝地区中心で進めてきた関係上、その他の地域ではジオパークの色が薄い。どこからが白滝ジオパークで来訪者がどこにいるのか、サイン看板などジオパークに来ていると感じさせる工夫が必要である。また、町全体での取り組みであることから、白滝や丸瀬布以外の地域の活動の活性化を工夫するべきである。

②ストーリーの構築について

遠軽町を貫いて流れる湧別川流域が舞台であり、黒曜石がその主体となる白滝ジオパーク全体のコンセプトとストーリーはできてきているように感じられるが、一方ではそのジオサイトや施設ごとで語られるストーリーはもっと充実できるはずである。丸瀬布昆虫生態館なども、もっとジオパークと関連づけて、看板と同時に、ジオコーナーや解説があってもいい。

③地域の持続可能な発展について

誘客につながるツアー素材の検討やツアーの設計なども始まっている。

雪のために黒曜石露頭など山間部へのジオツアーは不可能となる冬の期間、滝へのトレッキング、CAT スキー(雪上車利用のスキーツアー)などのツアーは既に実施されている。町中ツアーや雪を売りにしたツアーなど、冬場に活動が停滞しないようなツアー開発を期待したい。

林業、特にピアノの材料としてのエゾマツなどについて、地形や風土などジオ的な根拠で語られている。また、ヒンメリ(麦の茎で作る北欧のモビール)を通じて材料の麦の栽培で経済的な循環を行おうという取り組みも始められ、植樹しているシナノキのハチミツを使った石鹸や化粧品を、遠軽の特産品として製造・販売する直営店舗も開店した。

高規格道路建設に伴う道の駅の計画もあるので、そこで販売するジオストーリーで語ることでできる特産品の開発や再発見を促してほしい。

④事務局体制について

遠軽町は広大であり、全町的にジオパーク活動を推進するためには、遠軽町の西端にある白滝の施設に拘束時間が長い現担当者だけの活動では負担が大きく、時間がかかるものと思われる。白滝ジオパーク交流センターや埋蔵文化財センターでの活動をサポートできる人材を全町的に育成するなどして、より充実したジオパーク活動が全町に展開できる事務局の環境を整える工夫が必要と思われる。

【現地審査の結果】

2年前の再認定審査での大きな課題であった、ジオパーク運営の中心として機能するための組織の見直しについては、各団体や住民が協働して活動できる組織体系が示された。また、マスタープランも活動の中心となるワーキングチームが中心となって協議・検討を進めた上で原案が作製されている。

保護・保全や教育・防災に関する活動も事務局だけでなく、教育機関や各団体などと協力しながら活発化してきており、住民や関係者とともに動けるジオパークになってきたことがうかがえる。

一方で、遠軽町全体でのジオパーク活動のほが、白滝や丸瀬布以外の地域で不十分であることや、それらの地域でのジオパークの可視化が不足していることなど、まだ解決すべき課題が残されているが、新しい推進・運営体制と計画のもと、今後の活動に十分期待できることから、現地審査の結果としては、日本ジオパークとして再認定することを結論とする。